

# 学 教師が知っておきたい 校危機対応

## この資料でお伝えすること

- ① 危機はいつ起きてもおかしくないと考えて備えることが重要です。
- ② 突発的な危機に遭遇すれば教師自身に動揺が起こっても不思議ではありません。
- ③ 迅速な初期対応の後は、学校の日常活動の維持が重要です。
- ④ 多くの子どもがさまざまな形で事件・事故の影響を受けることを想定し、全ての子どもを対象に、心のケアを行うことが重要です。
- ⑤ 危機遭遇時に子どもたちを第一線で支えるのは身近な信頼できる大人である先生方です。
- ⑥ 危機遭遇時には、臨床心理士チームが学校の危機対応を支援する体制が準備されています。

私たちはこのたび、北九州市の先生方のご協力で「学校危機対応についての調査」を実施させていただきました。本資料はその結果と先行研究を基に作成したものです。ご活用いただくと幸いです。

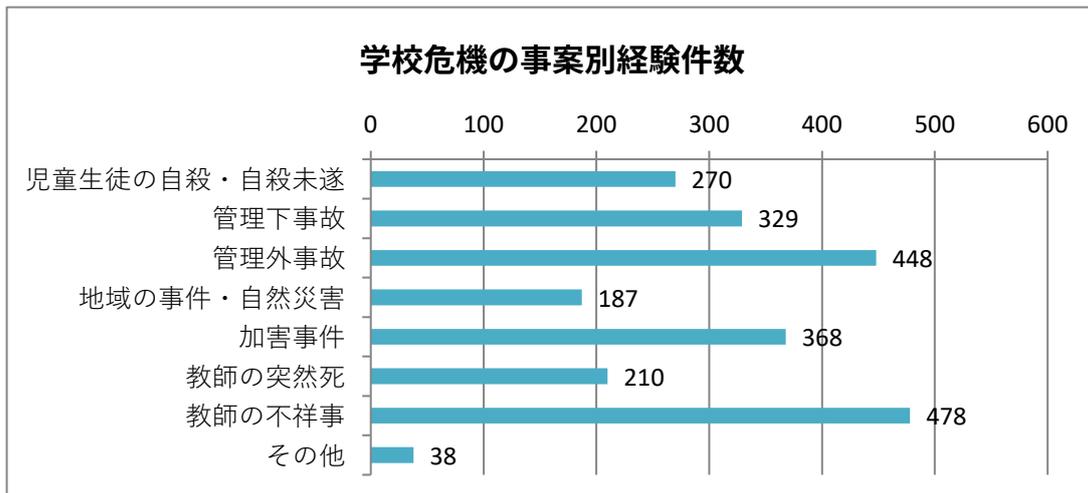
## ■ 学校危機とは

### Q. 学校の危機はどれくらい経験されているのでしょうか？

A. 全体の35%（994名）が平均2.3件、延べ2328件の学校危機に遭遇したと回答されています。

### Q. 学校危機とは具体的にはどのようなものですか？どのような事案が多いのでしょうか？

A. 児童生徒の死傷など、学校に大きな影響を与える突発的な事件・事故が学校危機と言われています。具体的には下の表の通りです。今回の調査では教師の不祥事を経験した方が最も多いという結果でした。ちなみに、同じ事案を複数の教師が経験している例も多いので、総計は事案件数より多くなっています。



## ■ 学校危機に遭遇した時の学校の様子

Q. 学校危機に遭遇すると学校はどのような状態になるのでしょうか？

A. 学校全体の様子としては、児童生徒、保護者、教師の混乱や、学校への非難不信、情報が隠されているような雰囲気などが生じます。教師には、ショック、呆然自失、不安混乱、自責などの反応が見られます。

Q. 事案によって学校や教職員の様子に違いがありますか？

A. 事案はその特徴から大きく、児童生徒の自殺、児童生徒の事件・事故による被害、教師の突然死や不祥事などの教師事案に分けることができます。

下図の大は、他の事案と比較してそのような状況や反応が多く表れていること、小は少ないことを示しています。

児童生徒の自殺や教師の突然死・不祥事に遭遇した場合は、事件や事故による児童生徒の被害事案の場合と比べて、学校への（保護者や地域からの）非難を強く感じ、教師自身にも自分を責める感情が強く生じていることがわかります。

児童生徒の自殺	
学校への非難	大
呆然自失	大
自責感	大

児童生徒の事故被害	
情報の隠蔽	小

教師の突然死・不祥事	
学校への非難	大
構成員の混乱	大
呆然自失	大
自責感	大

## ■ 学校危機時の対応

### Q. 学校危機へはどのように対応すればよいのですか？

A. 学校危機時の児童生徒の反応や学校としての対応の基本原則について下表にまとめています。原則として適切・重要であるものを○、そうでないものを×で示しています。（「少ないに×」は、少なくない=多いことを示します）。

ほとんどの項目については、回答の大半が基本原則と一致していますが、一部異なるものもあります。それらを中心に、次頁に解説します。

	基本原則	調査への回答
<b>学校としての対応について</b>		
a1 危機が生じても原則として（可能な限り）学校は休校せず部活動なども実施する	○	
a2 危機時には早い段階で職員会議を開き、事実を共有する	○	大半が○
<b>教師自身について</b>		
b1 危機に直面して多大な不安を持ち、その場から逃げたいと思うことは正常なこと	○	大半が○
b2 教師は自身の心身の状態にも気を配る	○	大半が○
<b>児童生徒の状態理解について</b>		
c1 亡くなった児童生徒と全く関わりがなくても不安定になる子どもがいる	○	大半が○
c2 教師の不祥事は子どもに影響を与えることが少ない	×	大半が×
c3 直後には気にしていないという子どもが後日不安定になることがある	○	大半が○
<b>児童生徒への対応について</b>		
d1 危機時には「話したい」と希望する子ども以外はそっとしておく方が良い	×	
d2 自殺などの場合は他の子どもが動揺するため死の事実は伝えない	×	大半が○
d3 子どもに対して危機時のストレス対処法について伝える	○	大半が○
d4 危機時にふざけたり騒ぐ子どもは厳しく指導する	×	大半が○
d5 子どもに不必要な詳細情報は与えない	○	大半が○
d6 子どもの質問には誠実に対応する	○	大半が○
<b>日頃からの備えについて</b>		
e1 日頃から危機対応について研修を行う	○	大半が○
e2 対人スキルアップ学習は、いじめ・自殺等の学校危機予防につながる	○	大半が○

---

## 基本原則に関する解説

### ●危機が生じても原則として(可能な限り)学校は休校せず、部活動なども実施する

直後の対応として、必要な措置を行った後は、できるだけ早く日常活動を再開することが何よりの心のケアとなります。学校は大半の子どもたちにとって安心できる居場所であり、休校によって一人ひとりがバラバラになることも回復を遅らせる要因になります。

### ●教師の不祥事は子どもに大きく影響を与える

児童生徒や教師の命に関わる事案に比較すれば、児童生徒への影響が少ないと言えますが、当該教師との関係によって、恐怖や怒りを感じる場合と、身近な尊敬と信頼の対象を失ったことによる強い喪失反応を示す場合があります。反応が異なる児童生徒が混在することで、相手の反応が理解し難く、相互に非難しあうことも危惧されます。教師も当該教師との日頃の関係によって擁護する立場と非難する立場に分断されることも少なくありません。先生方にとってもっともダメージの大きい事案が教師の不祥事であり、ご自身のセルフケアも重視してください。

### ●危機時には『話したい』と希望する子どもだけでなく全ての子どもへの対応が必要

突然の危機に遭遇した多くの子どもたちが、うまく表現できないさまざまな思い・考えを抱きます。無理に話させるのは論外ですが、このような思いや考えは、信頼できる人に話して受け止めてもらう体験を通して整理されていきます。そっとしておくのではなく、「いろいろなことを考えたり感じたりすることは自然であること」を伝え、「話したくなったらいつでも話を聴くよ」と伝えておくことは重要です。

### ●子どもたちに死の事実はきちんと伝える（ただし伝え方は慎重に考えること）

大半の回答者が自殺などの場合は子どもに死の事実を伝えるべきでないと回答しておられましたが、私どもは伝えるべきであると考えています。昨日まで生活を共にしていた仲間が亡くなった事実は消えることはありません。死因を伝えるかどうかは、ご遺族の意向を尊重する必要がありますが、少なくとも亡くなった事実はきちんと伝え、身近な人の死に遭遇して動揺する子どもの気持ちを受け止める必要があります。学校で伝えなければ、噂として間違った内容が伝わり、却って関係者が傷つく恐れがあります。具体的にどのように伝えるかについては、学校、市教委、臨床心理士チームで十分ご相談して決めていきます。

### ●危機時に子どもがふざけたり騒いだりしても頭ごなしに注意はしない

年齢が低いほど、危機に遭遇してどうしてよいかわからず、ふざけたり騒いだりといった不適切な言動を示すことがあります。不適切な行動は正す必要がありますが、頭ごなしに叱るのではなく「どうしたの？」と事情を聞いてみてください。

---

Q. 学校危機時には特にどのような児童生徒に配慮をしたらよいですか？

A. すべての子どもたちが何らかの影響を受けますが、特に次のような子どもに配慮してください。

- ①亡くなったり重篤な被害を受けたりした児童生徒とかかわりが深かった。＜情緒的な近さ＞
- ②亡くなったり重篤な被害を受けたりした児童生徒と生活空間を共にしていた（当該学級、部活など）。＜物理的な近さ＞
- ③当該事案とは無関係に、近い過去に他の被害や身近な人の死などを経験。＜時間的な近さ＞
- ④もともと不安定で学校適応が難しかった。

当該児童生徒との関係の近さ①にばかり目が向きがちですが、同じ学校に所属していることだけで多くの児童生徒が②に該当する可能性も高く、また全く無関係と思われる児童生徒も③、④といった事情で大きく動揺することがありますので、ご配慮ください。

**危機時にリスクが高い児童生徒チェックリスト**

- 情緒的に近い（当該の児童生徒と仲が良いなど）
- 物理的に近い（当該の児童生徒と一緒にのクラス、または事件の現場を目撃したなど）
- 時間的に近い（最近、被害や身近な人の死などを経験しているなど）
- もともと不安定（学校を休みがち、友人関係が持てない、家族のサポートが弱いなど）

Q. 児童生徒への心のケアとしてはどのようなことをすれば良いのですか？

A. 突然の事件・事故に遭遇した際の心のケアとして必要なことは次の3つです

- ①（当事者や保護者の了解の上で）「出来事についてのできるだけ正確な情報を共有する」ことで、情報がなくことによる不安や噂の蔓延を防ぎます。関係者で検討して決定した内容について、全校集会や保護者会などの場を通して、同じ内容を一貫して伝えることが重要です。
- ②危機的な出来事を体験した際の「ストレス反応と対処方法について伝える」ことで、セルフケアの力を高めます  
自分自身に起こっていることが、突然の危機に遭遇するという「異常な事態への正常な反応」と知ること、多くの健康な人は落ち着くことができます。
- ③出来事についての「ありのままの気持ちや考えを表現する機会を保障する」ことで、無理に気持ちを抑え込んでしまうことなく周囲と気持ちを分かち合えるようにします。  
具体的には、アンケートや個別面談などを通して行います。大半の子どもたちは、日常生活を共にしている教師にありのままを受け止めてもらうことで、徐々に落ち着きを取り戻していきます。

## ■ 学校危機への遭遇体験と教師

Q. 学校危機に遭遇することで教師はどのような影響を受けるのでしょうか？

A. 今回の調査では、学校危機を経験することで、次のような肯定的な変化が確認されました。

① **学校危機対処効力感**（危機に遭遇しても適切に対処できるであろうという見通し）

危機のイメージ、危機の際に冷静でいられるという見通し、危機に適切に対処できるという見通し、いずれも、危機を経験した回答者の方が、経験のない回答者よりも強く持っていました。

② **危機後成長感**（危機を経験したことによる人生観、価値観などの変容）

危機を経験した人たちは、他者への信頼の高まり、人間関係の重視、価値観の変容を強く感じました（いずれも4点尺度で平均3点以上）。

## ■ 学校危機対応と臨床心理士チーム

Q. 臨床心理士チームとはどのようなものですか？

A. 福岡県臨床心理士会では、平成13年度から学校が突発的な事件・事故に遭遇した際に、学校・教育委員会からの要請を受けて、臨床心理士チームが危機対応のお手伝いをする緊急支援活動を行っています。福岡県の場合、事件・事故の翌日から当該校のスクールカウンセラーを含む数名の臨床心理士が入る体制がほぼ整っています。

Q. 臨床心理士チームは何をするのですか？

A. 管理職の先生方、市教委の先生方とご相談しながら、子どもたちを第一線で支える先生方の後方支援として、主として次のようなことを行います。

- ① 危機対応全体のプログラムの検討・助言
- ② 教員研修（危機時のストレスと対処方法、児童生徒の理解と対応についての説明）
- ③ 学級担任への児童生徒の理解と対応についての助言
- ④ 動揺の激しい児童生徒、教師のカウンセリングと必要に応じて専門機関への紹介
- ⑤ 保護者会での児童生徒の理解と対応についての説明
- ⑥ 上記のために必要な資料の作成・配布 など

Q. スクールカウンセラーだけの支援では不十分ですか？

A. スクールカウンセラー自身も当該校の職員の一人であり、自身も出来事によって大きな影響を受けて冷静に対応できない場合もあります。また、学校危機対応は児童生徒全体に対して行う必要があり、どれほどのベテランであっても一人で対応することには限界があります。

危機対応について、あらかじめ研修をしておくことで、危機発生時に落ち着いて対応することが可能になります。校内研修等のテーマに取り上げていただけると幸いです。SCにお申し出ください。

（参考図書）

福岡県臨床心理士会編 窪田由紀・向笠章子・林幹男・浦田英範著 2005 学校コミュニティへの緊急支援の手引き 金剛出版